特集用・紀行エッセイ・
宮崎汎会員が見た世界第１部映画編
映画「赤い風車」と画家ロートレック　フランス

フランスの「最も美しい村」に選ばれている南仏のコルド・シェル・シュルを見学し昼食となった。近くに座ったガイドがこの村の近くにロートレックの生まれたアルビの町があると話した。ここから車でわずか３０分の距離だが、時間が無くて立ち寄ることは不可と諭され、残念ながら立ち寄りは諦めざるを得なかった。

フランスの「最も美しい村」の一つ、中世の面影色濃いコルド・シェル・シュル

城壁から見た南仏の田園風景

以前見た映画「赤い風車」の場面がにわかに記憶の底から浮き上がり、主人公ロートレックは、このような穏やかな素晴らしい自然環境の中で子供時代を過ごし、そして華やかな都パリへ出て行ったのかと改めて村の高みから南仏の田園風景を眺めた。

「フランスの最も美しい村」は田舎の景観を保護することを目的に「フランスで最も美しい村協会」が設立され協会の厳しい審査を経て認可される。審査の基準は人口が２０００人未満であること、景観・芸術・科学・歴史に関し最低２つの遺産・遺跡を有していることなどである。現在フランス全土で１５０を超える村が認可され、結果辺鄙な田舎に世界各国から多くの観光客が訪れ潤うようになった。

「赤い風車」はロートレックの伝記小説ムーラン・ルージュ（作者ピエール・ラミュール）を原作に１９５２年アメリカで製作された。監督はジョン・ヒューストン。作品は話題作で数々の映画賞を受賞している。

ストーリーは１９世紀末、フランス人画家ロートレックの短いが波乱に満ちた生き様を描いたものである。主人公のロートレック本人の写真は今に残っているが、彼は事故によって両足の成長が止まってしまう病で身長が低かった。映画ではロートレックに扮した俳優ホセ・ファーラーは１７８ｃｍの長身だったが膝を折り曲げ身長を低く見せる演技をした。

舞台のムーラン・ルージュは屋根に大きな赤い風車をのせた特色ある建物である。花の都パリの 18

区モンマルトルに近いクリシー通りに１８８９年オープンし、すでに１３０年以上が経つ。
客席は８４０名を迎えられる。第１次大戦、第２次大戦中も営業を続けた。ディナーショーに加えさらに夜中２３時からのドリンクショーもあって現在も人気は衰えず賑わっている。
クリシー通りや近くのピガール広場付近にかけては夕刻になると街娼やポン引きが多くたむろし、夜は少々怪しげなところにかわる。ムーラン・ジュールやリドやクレージー・ホースなど不夜城はパリのナイトライフを楽しむ人々にとっては格好のスポットとなっている。

１９７８年、クリシー通りにある屋根の上の赤い風車が目立つキャバレー“ムーラン・ルージュ”

この映画のバックに流れる“ムーラン・ルージュの唄”がまたいい。いろんな人が唄い、日本人歌手も唄っている。パーシー・フェイスが奏でる演奏やフランスの女性歌手でけだるいハスキーな声のジュリエット・グレコの唄などは今も耳朶に残る。
アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
（１８６４年―１９０１年)、南仏アルビで生まれる。生家は伯爵家で両親はいとこ同士で今風にいうと近親結婚であった。彼は子供時代を祖父の居城であるボスク城で過ごしたが虚弱であった。ロートレックは８歳の時母とパリで暮らしながら絵のレッスンを受ける。
１３歳で左大腿骨骨折、翌１４歳で右大腿骨骨折し、以来足の発育に支障をきたし、身長は１５２ｃｍで止まった。生まれつき虚弱体質で足の生育が止まってしまうなどは近親結婚が原因との説もある。病を得て故郷のアルビに戻り生活をするが、１８８２年再びパリにやってきてモンマルトルで絵を学び画才を開花させる。自身障害を持つ身であり、次第に娼婦や踊子に関心を抱き１８８９年モンマルトルにオープンしたキャバレー、“ムーラン・ルージュ”や酒場に入り浸るようになる。そしてそこで働く踊子たちと親しくなりポスター作製のモデルとし多くの作品を残している。
ロートレックはポスターを描きながら一流の画家としての高い評価をも獲得した。
体調がすぐれず１９０１年パリを引き払いジロンド県にある母の居るマルロメ城で療養するも、両親に看取られながら脳出血で死去した。享年３６歳であった。　　（２０１４年）